

## 北前船の足跡を訪ねて

### Tracing the Ports and Influence of the Kitamaebune

関野 章代<sup>1</sup>

SEKINO Akiyo

#### I、はじめに

日本国内各地を旅する時、北前船の資料館を訪問し北前船に興味を持った。訪ねた各地の北前船の足跡をまとめ報告書とする。江戸時代半ばから明治にかけて日本海を縦横無尽に航行した北前船、大量物資を運搬するには陸路より海路の方が有利だった時代、日本海は物流のメインストリート。蝦夷地と大坂を日本海廻りで往復した北前船は船主自らが寄港地で商品を仕入れ、それを欲する土地に運び売りさばくことで莫大な富を得た。また、物資だけではなく文化・食習慣も運び近代化に向かう日本で大きな役目を果たしていった<sup>1)</sup>。

#### 北前船の名称・航海

北前船と呼ばれている船は江戸時代から明治の初めに日本海で活躍した廻船（弁財船）のこと、特定の船型の言葉ではない。北前とは古くから瀬戸内海の人々が日本海側を一般に指して用いた言葉で、関西・瀬戸内海と蝦夷地との間を往来して輸送にあっていた北陸地方の貿易船の呼称<sup>2)</sup>である。



図1 北前船西航路図<sup>3)</sup>---航路・寄港地

河村瑞賢が、1671年に東北日本海沿岸より津軽海峡を経て江戸に至る「東廻り航路」を開いた。西廻り航路とは日本海沿岸より下関経由で大坂に至る、この航路は1639年の石川県宮越から加賀の登米百石を積んで大坂へ運んだのが始まりで1672年の河村瑞賢の改良で秋田以北にも及び後に北海道の松前にまで至るようになった。18世紀後半から19世紀の日本海では、多くの和船船主が、自ら商売も兼ねる船持ち商人として活躍していた、こうした船持ち商人の船を北前船と呼んでいて北海道産魚肥の取引で船持ち商人は莫大な利益を獲得した<sup>4)</sup>。北前船の航海は西廻り航路が主で大坂を基地に北海道へ向けて一年一航海である<sup>2)</sup>。当時、大量の物資を運べる唯一の手段であった船を使用した。

北前船は3月下旬に大坂を出発し、途中売り買いの商売をしながら瀬戸内・下関を経由し日本海に出て、そのまま寄港地を巡りながら5月下旬北海道に到着した。そこで昆布やニシンを積み込み、そこから今度は逆ルートで7月上旬に日本海を南下した。帰りも日本海の港で商売をしながら、途中下関で畑の肥料にするニシン粕の相場情報を仕入れ、それを瀬戸内で売りつつ最後11月上旬に大坂で全て荷を売りさばいて北前船の一年が終わる。北陸などの各地から来ている船乗りは歩いて故郷に帰り正月を迎えた。

そして帰郷の際、地元の神社に無事の航海を感謝し絵馬を奉納したため各地に絵馬が残っている。北海道に行く下りの積荷は米・酒・塩・紙・木綿など、大坂に行く上りの積荷はニシン・昆布などの海産物や麦粕。積荷の利益は下り荷三百両、上り荷七百両で一航海の利益は千両と言われ莫大であった<sup>2)</sup>。

明治時代後半以降は電信や鉄道網の発達により北前船は衰退していった<sup>3)</sup>。

## 1 梅花女子大学 名誉教授

### II、各地の資料館

#### (1、滋賀県東近江市・近江八幡市

北前船の始まりと船主の心意気の原点は近江商人とされている。そこでまず滋賀県にある近江商人を訪ねた。近江商人とは江戸時代に天秤棒を肩に荷物を持って北海道から九州まで全国を行商に出た商人のこと<sup>5)</sup>。彼らは江戸時代初期に海峡を越えて北海道に渡り、北海道初期開発に尽力した。北海道交易の開拓者は近江商人であり、まだ定住者の少ない未開地の北海道に移り、松前藩と一体の開拓によって藩の財政を一手に握るようになった。

最初に北海道に進出した場所請負商人は近江商人で彼らは両浜組（りょうはまぐみ）という仲間組織を作り、上方から生活用品を北海道に送り、北海道の産物を上方で販売するようになり18世紀の北海道産物の流通を独占的に支配した<sup>6)</sup>。当時幕府から北海道でのアイヌとの交易権を与えられた松前藩は自分たちの生活のため近江商人に積極的に漁場開発（場所請負）をさせたため、北海道の水産業が多いに発達した<sup>5)</sup>。

近江は海に面していない国で利用した港は隣の若狭の小浜や越前の敦賀であった。そのため、船乗りは若狭・越前・能登など北陸の船乗りが雇われた。最初は小浜・敦賀から琵琶湖の大津経由で京都・大坂に荷は運ばれた。18世紀初め日本海を南下し下関から瀬戸内海経由で大坂に入る西廻り航路が開発されると、荷はこのルートが使用されるようになった。明治維新後、1869年場所請負制度が廃止され、独占支配していた場所請負人の近江商人たちは次第に店を閉鎖していった。そして、次に松前・江差・函館・小樽に残した近江商人繁栄の地に北陸の北前船主たちがその全盛期をむかえることとなった。

#### ①近江商人博物館



昔は八幡商人、五個荘（ごかしょ）商人、日野商人など近江の出身地名で呼ばれ後世まとめて近江商人と呼ばれるようになった。この博物館は五個荘（ごかしょ）商人の出身地で、彼らは行商で各地の人々

と知り合い、欲しがっている物の情報を丹念に集め、この情報収集力が抜群だった。彼らの商いの手法は「諸国産物まわし<sup>5)</sup>」と言われ、各地の産物を売れ筋にまわして売る商法、これが北前船に生かされ受け継がれた。また、彼らが大切にしていた商いの商法・家訓「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし<sup>7)</sup>」の考え方は四書五経の中に自分たちの思想のよりどころになる格言を見つけ家のモットーにしていた。

・諸国産物まわし：近江商人の商いの手法は「諸国産物まわし」と言われている。近江の特産物を各地へ持ち下がり、北海道の海産物・昆布や山形の紅花・青苧、関東・東北の生糸などの原材料を「登せ荷（全国各地から上方へ運ばれた産物）」として、上方に持ち込み加工し、商品として再び「下し荷（上方から全国各地に運ばれた産物）」として販売した。全国各地の産物を売れ行きの良いところへ回転させる商法、これが後の北前船となった。登せ荷の代表的な産物はニシン、荒巻鮭、魚油、生糸、青苧、紅花、木材など。下し荷の代表的な産物は口紅、古着、生活用品、たばこ、綿、米、漆器、陶器、味噌、薬など<sup>3)</sup>。おせちの定番、数の子・ぼうだら・昆布は北の海の幸、近江商人が漁場を開発収穫し、日本海を通過して上方江戸に持ち込んだおせち料理、京都のにしんそば、大阪の吹き寄せ昆布は近江商人の活躍から生まれた名産<sup>8)</sup>と言える。

・近江商人の思想：「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方よしは売り手商人が儲ける商いだけではなく、買い手が満足し、さらに商いの儲けを通じて地域社会の発展・環境に貢献しなければならない。この理念は1754年中村治兵衛が幼いあつぎに残した「宗次郎幼主書置<sup>7)</sup>」で初めて確認された。この書置きの中では「三方よし」の言葉は出てこないが、後世近江商人研究者がすべての人を大切にす商業の考え方をわかりやすく伝えるために「三方よし」と表現した。

## ②近江八幡市立資料館



豪商の八幡商人西村太郎右衛門邸跡に近江八幡市立資料館を開設。彼は江戸時代初めに御朱印船貿易で安南（ベトナム）に渡り巨利を得た。他に、八幡商人岡地勘兵衛がシャム（タイ）、中村勝治郎が中国・朝鮮半島で活躍した。



西村太郎右衛門邸跡前の豪商伴庄右衛門邸跡で、彼は江戸初期に麻布・畳表・蚊帳を商う八幡商人。伴庄右衛門家の家訓は「吾、即ち先祖の手代なり」、これは店と資本は先祖の預かりもので、今の主人の私有財産ではないと戒めている。

北前船と同じ経路で起点の大坂から北海道へと北前船の足跡を訪ねる。

## (2、大阪府大阪市大阪湾

北前船の起点と終点の大坂湾。大坂は古来より「水の都」と呼ばれ、淀川を初めとして、多くの川が大坂湾に流れ込むデルタ地帯。天然の良港で、都と海を結ぶ交通の要所でもあった。そのため、古来より国際港難波津、住吉津があり、朝鮮半島・中国など海外に開かれていた。北海道と日本海を結ぶ北前船、江戸との間の菱垣廻船、京都を結ぶ三十石船、伏見船など多くの船が往来し活況を呈していた。大坂港は浅かったため大きな船が入港できるように港を深く掘り下げ、その土砂の積み上げ地が天保山になった。斎藤善之氏<sup>9)</sup>の「大坂から見た北前船と北国市場」で江戸時代に全国市場のカナメであった大坂から見て北前船ないしは北国市場がどういう位置づけかを述べている。大坂にとって北国市場はまず北陸雄藩の城米・藩米の登場によって認識され江戸時代の三大飢餓の最初の享保の飢餓を打開するために北国米を大量に大坂市場に持ってきた。これが大坂は北前船にとって最も重要な拠点になった始まりであった。



国道 26 号線の交差点住吉公園前に大きな常夜灯（住吉高灯籠）が設置されている。北前船の主人公の一つがこの常夜灯で、日本海、瀬戸内海で常夜灯がある場所は北前船の寄港地と考えられている。



大阪湾の埋め立てが進むまでは住吉大社の前まで白砂青松の美しい住吉津が広がっていた。それは上方風景画の第一人者長谷川貞信（初代）が描いた「浪花百景之内 住吉高灯籠」にあり、風景画の右に描かれているのがこの常夜灯（掲載国立国会図書館の承認済み）。灯台は日本最古のもので鎌倉時代末の創建と言われている。大阪湾の難波津は潮流が激しくそれに比べて住吉津は穏やかな湾であるため、ここが海上交通の要衝となった。



住吉大社は全国 2000 社余りある住吉社の総本宮で海上守護・交通安全・産業などの守り神。北陸などの各地から来ている船乗りは航海の安全祈願にまず住吉大社を訪れた。北前船が終点大坂港に着いた後は歩いて故郷に帰り正月を迎えた。帰郷の際、地元の神社に奉納した絵馬はここ住吉大社のものが多かった。



石灯籠群

日本遺産として認定された「荒波を超えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」に

北前船にゆかりのある構成文化財として「住吉大社」と大社境内に並ぶ「石灯籠群」が追加登録された。境内に 620 基ほどの灯籠があり当時の風情を感じることができ大迫力。江戸時代に大量輸送ができる船での輸送が盛んになると大坂に寄港した北前船などたくさんの船頭たちが海の神様の大社に航海の安全祈願に訪れ、灯籠を奉納した。北前船ゆかりの廻船業者が奉納した灯籠がたくさんあり、加賀の北前船船主の豪商銭屋五兵衛家の番頭銭屋喜助の名もある。



### 海を守る神 全国で信仰<sup>10)</sup>住吉大社

海を守る神の記事：これらの港町は、荒波を越え、動く総合商社として巨万の富を生み、各地に繁栄をもたらした北前船の寄港地・船主集落で、時を重ねて彩られた異空間として今も人々を惹きつけてやみません。北前船は、江戸時代から明治にかけて日本海や瀬戸内海を航行し、北海道・東北・北陸・西日本の各地で米やコンブ、酒、塩などの積み荷を売買した商船、食文化や各地の文化なども伝わった。寄港地には船や船頭たちにまつわる文化財がたくさん残っている。

#### (3 兵庫県たつの市室津

室津は海の宿駅として栄えた、古代から深く湾入した良港をもち平清盛も寄港したとされている<sup>11)</sup>。江戸時代、西国大名は参勤交代の時この室津の良港を利用した。また、朝鮮通信使、琉球使節の一行も立ち寄った国際港で繁栄した。



海駅館は近世から廻船問屋として活躍した豪商嶋屋半四郎が江戸後期に建てた遺構。海の宿駅として栄えた室津の歴史を廻船、参勤交代、江戸参府、朝鮮通信使の4テーマで展示している。



- ・廻船：中世から船での商品輸送が盛んで、江戸時代になると西回り航路の発達で廻船問屋の活動は北海道にまで及んだ。
- ・参勤交代：1635年参勤交代が制度化。西国大名は瀬戸内海を船で江戸に向かい、参勤コースに当たる室津は大名の上陸・乗船地点で海の宿駅として繁栄。
- ・江戸参府：江戸時代オランダは長崎出島で通商を許され、商館長は毎年将軍に拝礼、これを江戸参府という。このとき室津港を利用し、シーボルトも参府に同行し植物、動物など日本を詳細に調べた。
- ・朝鮮通信使：朝鮮王国の親書を将軍に持参した使節団、一行は500人前後で大船団、大行列を作り江戸へ。このとき室津港に寄港した<sup>11)</sup>。明治になると参勤交代、江戸参府、朝鮮通信使が無くなり、鉄道・道路が内陸部に敷かれたため室津は急速に衰退した。

(4、兵庫県赤穂市坂越（さこし）港

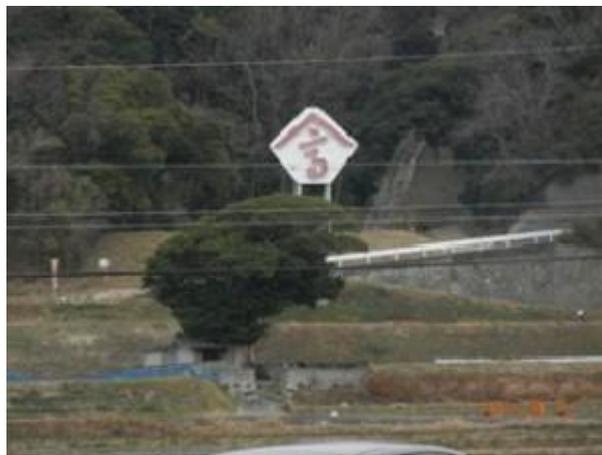


坂越湾に飾られた北前船の模型

坂越は赤穂市の東部にある港町で、都市景観 100 選に選ばれた古い町並みが北前船での繁栄を物語っている。坂越湾は弧を描く地形と湾内に浮かぶ生島によって<sup>12)</sup>古くから良港として栄えた。港から綿、塩を北に運び、帰りに北海道海産物、酒田の紅花などを持ち帰った。坂越が北前船で繁栄したのは赤穂塩の品質が日本海側の塩と比べて各段に良く、大きな価格差があり大儲けができたためである。赤穂は大量の塩を生産できる塩田の開発を早くから行っていたため北前船で大量の塩を運ぶことができた<sup>13)</sup>。

(5、兵庫県洲本市都志

淡路島洲本市都志は北前船の高田屋嘉兵衛の生誕地。高田屋嘉兵衛は5人の弟たちと回漕業を起こし、1796年28歳で当時としては最も大きな「辰悦丸（しんえつまる）」を新造。淡路島から箱館へ渡り、箱館を拠点として西廻航路北前船の事業を展開し「北の豪商」になった。高田屋は兵庫に店を持つ船持ち商人で18世紀末に箱館に店を設け択捉に漁場を開設した。幕府が北海道を直轄にしたのに伴い幕府御用商人になり更に侍格に取り立てられた<sup>13)</sup>。箱館の豪商として湾内の埋め立て、港の整備、道路の改修などを行い箱館繁栄の基礎を築き、「箱館の街の開祖」と言われ今も尊敬されている。また、択捉国後島間の航路を発見し、新たな漁場を開くなど北方の開拓者として活躍した<sup>14)</sup>。



高田屋の屋号



ロシア人ゴローニン艦長と嘉兵衛が並び立つ日露友好の像

嘉兵衛が北方で活躍していたころ、択捉島（エトロフ）の漁場からの帰りに偶然ゴローニン事件に遭遇し、彼はロシアに捉えられ連れて行かれた。翌年帰国し、捕虜になっていたゴローニン艦長を江戸幕府の説得で釈放し日露両国の和解を実現した。江戸時代に日露民間外交の先駆者としても、偉大な功績を残した<sup>14)</sup>。そして、今も洲本市都志はロシアとの交流が続き、ゴローニンと嘉兵衛の子孫たちの再会があった



高田屋嘉兵衛都志屋敷の跡地

引退して故郷都志に帰った嘉兵衛は私財を郷土のために使い、都志港突堤の築造、先山千光寺の三重塔の修理などを積極的にした。

(6、香川県多度津町)

香川県の中部に位置し、1694年丸亀藩から分家した一万石の小藩が巨額を投じ港の整備をした。古くから良港の恩恵を受けてきた多度津<sup>2)</sup>。江戸時代より北前船の寄港地として栄え、全国から様々な物産や情報の集まるさぬき一の港町へと発展した。また、金刀比羅宮へと続くこんびら街道の玄関口としても賑わい、たくさんの参拝客が多度津の港からやってきた<sup>15)</sup>。



北前船で讃岐三白の砂糖、綿、塩などを積み、帰りは干鰯（ほしか）、肥料などを持ち帰った。江戸末期農家は肥料に干鰯を多く使用するようになった。北前船の入港で魚肥の需要が増え干鰯問屋が軒を並べた<sup>16)</sup>。

(7、岡山県倉敷市児島)

江戸時代に「天領」になった倉敷は古来より交通の要衝で、高梁川の支流の倉敷川を運河として利用していた。その河港には多くの商人が集まり、倉敷湖畔は次第に高梁川流域の物資が集まる商業の中心地として栄えた。江戸・明治時代に建てられた伝統的な建物を中心に日本の伝統的な美しい町並みができ現在の景観地区として残っている。



児島半島の先端、下津井は北前船の風待ち、潮待ちの良港で藩の外港として栄えた。また、讃岐金刀比羅詣の人々の宿場として繁栄した。玉島は大規模な干拓で綿花栽培に成功し、積み出し港としても栄えた。児島は塩田からの塩を積み出し栄えた。これら3港のうち下津井・児島は綿花栽培が盛んで北海道のニシン粕を必要とした。帰り荷には下津井は綿、児島の塩が積まれた。



江戸時代の大規模干拓で綿花栽培が始まった。明治期以降は学生服・ジーンズ・畳縁など様々な製品が作られ特に児島は国産ジーンズ発祥の地として素材から仕上げ加工まで品質の良い製品を生み出し観光客を集めている<sup>17)</sup>。

#### (8、広島県福山市鞆の浦

鞆は瀬戸内海の中央部に位置し海流が満潮時にはぶつかり合い、干潮時には東西に分かれて流れ出す所。このような所を通るには鞆の浦で潮の流れが変わるのを待つ必要があり、潮待ちの港として栄え海上交通の要衝であった。「万葉集」に「鞆の浦」の地名がすでに出ていて、「足利氏は鞆に起り、鞆に滅ぶ<sup>18)</sup>」と言われるように軍事拠点としても重要であった。西廻り航路が開発され北前船などの商いをする船が出入りするようになると、商港として大きく発展し活況を呈していた<sup>19)</sup>。また、室津と同様に朝鮮通信使・琉球使節・オランダ商館長の一行などを受け入れ海外から文化も受け入れた国際都市。北前船では鞆の浦からは木綿・畳表・船釘・錨・保命酒などが出ていき、綿花・畳表の栽培に必要な魚肥の干鰯・ニシンなどがまた各地からあらゆる特産品が入った<sup>19)</sup>。



靱の浦



常夜燈

江戸時代に北前船が来た証拠である常夜燈・雁木（がんき）。重要な港湾を守る江戸時代の港湾施設、「常夜燈・雁木（がんき）・波止・焚場（たでば）跡・船番所跡」の5点セットが日本で全て残っているのはこの靱の浦だけである<sup>20)</sup>。

#### （9、山口県下関市下関港

本州と九州の間の狭い関門海峡を全ての北前船は通った。下関港が商業都市として発展したのは江戸時代からでそれまでは交通都市の性格が強かった。



下関港

ここは、瀬戸内海と日本海の分岐点で北行の船は日本海の荒波に気合を入れ、大坂行きは荒波が終わりホッとする関であった。「押せや押せ押せ下関までも押せば港が近くなる」と新潟県新飯田で唄われていた盆踊り唄の歌詞。北国の米、肥料、干物、木材などを満載し下関を目指し日本海を西下りしました。北海道沖でニシンを積んだ北前船の船頭は、下関で瀬戸内のニシン相場の情報を集め、瀬戸内から大坂間で売りさばいた。このように情報の収集源でもあった下関は重要な場所である。北前船の寄港地、物質中継地としての下関にもたらした富は膨大なもので江戸時代に入ってから下関は「西の浪花」と呼ばれ大繁栄をした。河村瑞賢の開発した西廻り航路の起点が酒田で、大坂までの一番大きな湊が下関。北前船がもたらした大きな富が長州藩の豊かな軍資金になり、革新を目指す維新の志士らを支えたと言われている。

(10、山口県萩市浜崎港)

萩市浜崎港は江戸時代前期には北前船の寄港地として繁栄したが、江戸後期には北前船が大型化し水深の浅い浜崎は敬遠され船が入港しなくなった。また、北前船の大型化により小さい湊や御用米が主流の湊は徐々に敬遠され、大型化した北前船は寄港地を少なくして日本海を一気に北へと向かった。



浜崎地区に藩主が乗る御座船（ござぶね）が現存している。三方を玄武岩の石積みで囲こみ前面には木製扉が設けている頑丈で立派なものである。昔は御座船の前まで海が迫り直接船を出し入れでき、浜崎地区が北前船で栄えていた当時の名残である。

(11、島根県大田市温泉津沖泊（ゆのつおきどまり）)

温泉津沖泊は島根県大田市に位置する。



16世紀後半毛利氏が石見銀山を支配し、温泉津沖泊は銀の積み出しと銀山への物資補給で栄えた港。銀山が衰退した江戸時代には北前船の風待ち港として寄港地となり栄えた。



江戸時代に北前船の寄港地で栄え、船をつなぐ「鼻ぐり岩」がたくさん残っている。鼻ぐりとは牛の鼻輪のことで岩に穴をあけたものや杭のように岩を立てた棒状のものなど形はさまざまである。鼻ぐり岩がかつては四百余りもあったが、現在は沖泊地区に残っているだけである。

#### (12、島根県松江市美保関港

島根県松江市に位置する美保関港は昔から風待ちの港として、江戸時代から大正末期にかけ山陰の海の玄関口として栄えた。



美保関港の常夜燈

江戸時代には北前船交易の要所としても繁栄。美保関港に常夜燈があり、山陰の海の玄関口であることが分かる。



美保神社



美保神社の井戸

美保関港の近くにある美保神社に奉納した北前船の絵馬が多数飾ってある。美保神社の井戸は廻船御用水で、干ばつが続き、この場所に井戸を採掘することになった。美保神社の井戸廻船の用水として欠かせなかったこの井戸を諸国の北前船の船頭、船主が浄財を寄進し出来上がった。

### (13、鳥取県境港市

境港市は市名に港を付けているとおり、港と共に発展した。島根半島が自然の防波堤となり波静かな恵まれた天然の良港で、江戸時代は北前船の寄港地、島根藩の藩米を運ぶ千石船の港として発展し現在も山陰地方の主要な港である。



境港市出身の漫画家水木しげるの曾祖父は廻船問屋を営み、彼が取引先に配った宣伝チラシ「引き札」の公開展に行った。曾祖父は江戸時代末期から明治にかけて境港で廻船問屋を経営し、運航する北前船で弓ヶ浜特産の伯州綿を全国に運び、綿作りの肥料として北海道産「ニシン粕」を北前船から大量に買い込んでいた。弓ヶ浜の綿や木綿の買い入れと綿作の肥料として大量に使用された北海道産のニシン粕売り込みに、北前船は境港にたくさん入港した。明治半ばに鉄道が発達してくると大きな船が入れない多くの港は衰退していった。港の環境に恵まれていた境港は新しい時代に対応した日本海側有数の港として今も発展している。引き札とは江戸から大正時代にかけて、商店、問屋、宣伝販売元などの宣伝に作られた広告チラシ。引き札は大正時代に新聞広告の普及発展で衰退した<sup>21)</sup>。

### (14、兵庫県豊岡市竹野町

竹野は北前船の寄港により、江戸時代から明治末期まで多くの船主が住み廻船業の村として栄えた。竹野浜は能登半島から但馬入りした北前船が食料・水の補給をしていた。猫崎半島の東側は季節風の陰に

なり暴風を避けることができる風待ち港であったためである。岸壁の岩場の石に穴が開けられているのを見ることができ、これは北前船を固定するためのものである。



北前館の展示物

北前船の歴史を伝える貴重な資料が展示されていた。



北前船の船主が寄進した御神燈

北前船の船主が寄進した御神燈や方角石があった。この方角石は北前船が出入りした港の近くに必ずある山から海を見渡せる場所にあり東西南北を指示した。この燈の後方に焼杉板の家がたくさん建っている厚い杉板の表面を焼き炭化させて海岸通りの塩分を含んだ風雪から家を守っている。竹野に伝わる会席料理「おしあげ料理」は地元の魚介類を使った郷土料理。「おしあげ」という言葉は、船を浜に「押し上げ」たことが語源とされている。漁の無事と漁師の労をねぎらい、「押し上げ」の料理を振る舞っていた。

#### (15、京都府宮津市

宮津の繁栄は、丹後ちりめん・海産物・醸造産業に支えられ、北前船の港町として廻船問屋、大きな蔵が立ち並ぶこととなった。また、日本三景を見ようと旅人が集まり、旅籠も盛況になり宮津は全国津々浦々に知られるようになった。



京都宮津の北前船資料館

丹後・但馬の拠点には宮津のほかにも舞鶴・久美浜・竹野があった。



若狭湾に注ぐ大河、由良川の領域には縄文時代の遺跡がかなり分布し古くから多くの人々の生活が由良川にかかっていた。由良村の多くが川船にかかわり生活の糧にしていた。川の勾配が緩く川船の行き来に適し舟運が大いに栄え江戸時代から明治に至るまで河口の由良は由良川水運の港として栄えた。明治時代の由良の船頭の航海日誌には、丹後・若狭から越後・出羽間を往復し、そうめんや木綿、雑貨などを輸送していたとある。やがて北前船を操船し、船頭・乗組員として北は北海道から南は鹿児島まで全国の港々まで出入りすることになった<sup>22)</sup>。

(16、福井県南条郡

福井県南条郡南越前町にある南越前町立の資料館に行った。



北前船が元北前船主右近権左衛門家の前に海を背景に展示されている。



元北前船主の右近権左衛門家の旧宅前

旧宅に北前船の資料などを展示している。右近家は 18 世紀中頃近江商人の荷所船（にどこぶね；松前藩との交易に従事した近江商人の荷物を運んだ船）経営を行い両浜組商人と荷所船契約を結び、松前と敦賀を結ぶ日本海を往復していた。18 世紀末には近江商人の荷所船として仕事をしながら、自ら商品を仕入れ販売をする買積輸送を始め、船 1 隻から全盛期には 30 余隻を所有し北前船で大活躍した。北前船の衰退と共に蒸気船を導入し、海運の近代化を進めるとともに海上保険業に乗り出し事業の転換を計った<sup>23)</sup>。海難事故が絶えなかった北前船の経験を生かして明治時代に海運保険を初めて導入し損保業界に進出。10 代目右近権左衛門（1853～1916 年）は現在の損害保険ジャパンの前身日本海上保険を設立した実業家である。



『荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～』のストーリーが全国 11 市町の共同で 2017 年に日本遺産に認定された。

(17、石川県加賀市橋立（はしたて）

北前船で巨万の財を築いた船主が多く、日本一の富豪村といわれたのが橋立と瀬越。加賀国橋立は北前船商人の主要な輩出地<sup>24)</sup>、記録では橋立には 42 名の船主がいた。航海中に覚えた民謡松前追分を温泉で唄いそれをまねしたのが山中節の起源の説があり、北前船で文化が移動したことが分かる。



北前船の里資料館

資料館になっている建物の当主は橋立の北前船主酒谷長平で、明治 9（1876）年にこの自宅を建てた。資料館には航海に欠かせない磁石、望遠鏡、海図、神社に奉納した船絵馬、船箆、宣伝用引き札などを展示していた。「北前船で大儲けできたのは新しい情報を独占していたことによる。このことは情報が広く行き渡ると北前船のうまみがなくなり衰退した」と展示している。



酒屋酒谷家の正門前

酒谷家の敷地面積は 1000 坪で北前船当主としては中位。酒谷家は 18 世紀中ごろから荷所船経営を行い 18 世紀末買積輸送を始め大聖寺藩の御用金を負担して侍格になった<sup>24)</sup>、6 隻の船を持ち、巨額の富を北前船で得た。現在の船会社と違い他人の荷物を運んで運賃を稼ぐのではなく、船主が荷主として各港で仕入れた物を売り買いしながら航行し商売をした。そのため、上手くいけば大儲けができた。大坂から北海道への商売は現在のお金で 300 万円、北海道からの帰りは 1 億円の稼ぎだった。北前船は主に加工にしん製品を、特に「にしんの粕」を安く仕入れて高く売り儲けた。このにしんの粕は肥料として当時の日本の農業を大きく支えていた。ニシンは一般に「鯨」と書くがこの酒谷家の書類には「鯡」と書いてある。それは、にしんが魚には非（あら）ず、大判、小判の価値がありこの字になった。また、北前船で財を得た人々は富を自分達だけの物にはせず、道路整備、学校・病院を建て、銀行業などを行い社会に還元した。そのため、この地域の人たちは船主たちの子孫を今も誇りに思い尊敬している。酒谷家には仏間に仏壇が 2 個あり、主が北前船で不在のため家族が拝む夏用と主が拝む冬用である。橋立の船主は江戸時代に北海道に進出し、近江商人の雇船頭から独立して活動するようになった。松前追分を船乗りが唄うのを聞き、それが山中節になったと言われている<sup>25)</sup>。

(18、石川県金沢市宮越)

銭屋五兵衛 (1773~1852 年) の本拠地は金沢市の北にある犀川河口の宮越で廻船問屋が立ち並んでいる。日本海に面したこの一帯は日本五大醤油生産地で、この醤油も北前船に積み込まれた。



### 石川県金沢市にある銭屋五兵衛記念館

銭屋五兵衛は江戸時代後半に「海の豪商」、「海の百万石」と称され活躍した。記念館には幕末の鎖国状況にあつて早くから殖産事業の振興と交易の重要性を認識し、先見の明を持って積極的に国の内外を駆け巡って、富国民利をはかった海の百万石と言われる銭屋五兵衛の業績を紹介し、併せて北前船による北国の海運について理解する施設として開館<sup>26)</sup>したと記している。



銭屋は19世紀初頭に和船を所有し材木問屋を開業した。彼は17歳で材木問屋、金融業などの家業を継いだ。50歳代から北前船を使って海運業に乗り出し、金沢宮越に本店と全国34か所に支店を設けた。この全国ネットワーク体制を確立し江戸時代を代表する大海運業者になり金沢藩の他に会津・弘前藩とも取引を行い侍格となり巨万の富を得た<sup>27)</sup>。彼の偉業は築いた巨万の富が加賀藩の経済を支えたことである。海運業のほかに、材木、生糸、海産物、米問屋などを手がけ、鎖国状況にも関わらず南太平洋の島々やアメリカ大陸で取引したと言われ加賀藩は黙認し献上金を要求した。しかし、最後は巨大な財力で加賀藩の政争に巻き込まれ獄死した。

大阪府池田市にある銭屋アルミニウム製作所と何か関係があるのではとホームページ<sup>28)</sup>を確認すると次のような事が書かれていた。創設者竹安猪三郎の愛読した立志伝において、徳川時代に北は千島、カムチャツカから南は豪州タスマニアと海外に雄飛した銭屋五兵衛に深く共鳴し「銭屋」を登録商標し社名にした。

#### (19、富山県高岡市伏木

伏木港は富山県の西、高岡市の小矢部川の河口に位置し古代から日本沿岸屈指の良港として知られていた。18世紀から自ら渡海船を所有し交易業を営む有力な船問屋が台頭してきた。渡海船は、大坂から瀬戸内を通り、下関を廻って日本海に入り松前まで各港で買積した商品売りさばいた。この渡海船を大坂や瀬戸内では北前船と呼び、この辺りでは買船と呼んだ。明治時代に入って和船から汽船の時代を迎えると灯台、測候所を設け近代伏木港を築いた<sup>29)</sup>。越中各地から米が集まり北海道・大坂まで運び加賀藩が潤った。鋳物製造は今も伝統工芸として盛んであるが当時もニシン釜・塩釜などの製鉄品、香炉、仏具などの銅製品が全国に北前船で運ばれた。北海道からは昆布、ニシン粕がきた。それ以来昆布は富山県の食文化に欠かせなくなった。



伏木北前船資料館は廻船問屋だった「秋山家」

「伏木北前船資料館」は廻船問屋だった「秋山家」を資料館として利用している。伏木港を見渡せる高台にあり、港への船の出入りを見張るための「望楼（展望室）」を設けている。また、他にも北前船のパネルや模型、和磁石・船幟（のぼり）・船銘板・引き札など船で使った道具、資料も多数展示していた。秋元家は1800年以前より現在地で海運を家業とした旧家で当初は船頭などの宿泊施設であったが、時代と共に船を持つ廻船問屋として栄えた<sup>29)</sup>。



伏木北前船資料館には、北前船に由来する北海道の昆布の歴史が掲載されていた。伏木港は北前船の中継地、寄港地の一つ。北前船は北海道からは海産物のニシン粕、身欠き鯿、昆布などが運ばれ、寄港地の富山からは米、薬が積み込まれた。また、富山県漁民の北海道への移住、出稼ぎは1800年半ばごろから盛んになり、働き者の彼らは自然の厳しい北海道の端の根室、知床、歯舞諸島を開拓し、豊富な魚、良質の昆布で成功し故郷の家族、親せきに羅臼の昆布をたくさん送り、富山の昆布文化は開拓民と北前船で生まれ現在の姿になった。

・富山の昆布王国：北前船は別名「昆布ロード」とも呼ばれている。昆布が獲れない富山が昆布を日本一食べる食文化を持つのは、富山県の海岸線の長さは漁民一人あたりに換算すると短く、漁民は長く厳しい生活を強いられていたためである。そこで、北海道への出稼ぎ、移住が始まり1800年中頃から盛んになった。越中衆と呼ばれる彼らは働き者で現地の親方に気に入られ独立し、そこに住み着く者が出てきた。越中衆は北海道で一番自然が厳しく、人の少ない東端の根室、歯舞群島、羅臼、利尻などの地域を開拓した。そこでは豊富な魚、良質の昆布が獲れるなど成功し、成功した彼らはふるさと富山にたくさんの良質の昆布を送り、現在の日本一昆布を食べる食文化を富山に作った。魚の刺身を昆布で締め

る、昆布で巻いたかまぼこ、海苔ではなくとろろ昆布・おぼろ昆布で巻いたおにぎりなど富山独特の食べ物を作った<sup>30)</sup>。

・薩摩藩の中国への昆布輸出：良質の昆布が獲れない中国では昆布を欲しがっていた、内陸部で蔓延していた風土病ヨウ素不足の甲状腺腫に効果があったためである。その状況の情報を得ていた薩摩藩は金儲けの機会を見すごしません<sup>31)</sup>、北海道から北前船が運ぶ昆布を薩摩藩に紹介をしていたのが越中の薬売り。越中の薬売りは薩摩藩での売薬許可を得て、薩摩藩はその見返りに北海道の昆布を求め、藩は昆布を琉球から中国へ輸出した。これで莫大な富を得て幕末の討幕の資金とした、北前船がそのきっかけを作り北前船が時代を動かした。

・富山の薬売り：現在でも活躍している富山の薬売りは北前船との関係が深い。300年前の江戸時代初期富山藩主が「越中富山の薬売り」として知られる配置薬のビジネスモデルを考え、製薬・売薬を富山の産業として育成した。成立の社会基盤は近世の交通路、物資の流通機構の整備がある。西廻り航路ができ、北海道から東北、北陸、瀬戸内海、関西と九州へ物流が活発になり、富山売薬はこのルートに乗って大坂から原料を輸入し、製造した薬は積極的に全国へ行商に出ることになった<sup>32)</sup>。

・和食のうま味：北前船が本格化する江戸前期までの食べ物の調味料は味噌、醤油、塩が主。そして北前船が運ぶ昆布がやってきた、昆布の出汁は大坂で確立し、全国に拡散した。現在も関東では土佐の鰹節で取る出汁が主流でこれは①関東の水が関西より硬度が高く昆布からの旨味が出にくかった②大坂の残り物の粗悪な昆布が関東へ運ばれていた③昆布の到達時期がおそかったためとされている。現在、世界遺産に選ばれた日本の食文化を代表する昆布がこのような歴史<sup>31)</sup>で確立していったのは興味深い。

#### (20、新潟県新潟市

古代から信濃川の河口部に発達した新潟港は物資の集散、旅人の往来が多く、水深が深く良港として栄華を極めた。1671年西廻り航路の寄港地として指定を受け国内交易の重要な地位を確立し、日本海側の重要な港として栄えてきた。



北前船の時代館旧小澤家住宅

小澤家は江戸時代後期から米穀商で廻船経営に乗り出し港に関わる運送・倉庫業・回米問屋<sup>33)</sup>など様々な事業を興し経営を拡大した。北前船を支えた代表的な商家の一つで、「柳都」と呼ばれ新潟の繁栄を見ることができる。



旧小澤家住宅のそばの金刀比羅神社

旧小澤家住宅の近くに金刀比羅神社がある。江戸時代から明治にかけて日本海で活躍した北前船の模型が28点収められている神社。当時の船主や船問屋たちが航海の安全を祈願して奉納したもの。奉納和船は、水害や地震による破壊から守るために、拝殿内でするされ、拝殿は火災よけのために土蔵造り。また、和船の中には小澤家が奉納した模型もある。佐渡おけさは熊本県のハイヤ節が北前船の船乗りたちによって伝えられた<sup>25)</sup>。

(21、山形県酒田市酒田港

酒田港は古くから最上川舟運によって内陸から運ばれる米の集積地、海上運送の拠点となっていた。江戸時代に、幕府領の出羽国の年貢米を運ぶために幕府から依頼された河村瑞賢が東廻りより距離はあるが波静かで安全な西廻り航路を開いてから大坂の船が増え、北前船の拠点として栄えた。この繁栄を「西の堺、東の酒田」と井原西鶴が日本永代蔵<sup>34)</sup>に書いているように江戸時代から明治にかけて酒田は北前船の交易の活況を呈した。酒田からは米や、一級品として名を馳せた紅花などが上方向けに運ばれ、これによって酒田の商人は多大な富を築いた。北前船では酒田からはコメや京人形に欠かせない出羽の紅花を堺まで運び帰りには京都から江花で染めた京友禅、京人形や都の文化を持ち帰った。様々な上方文化が北前船に乗せられたが、その一つがお雛さま。当時の酒田の豪商たちは競って京都から豪華なお雛さまを買い求め、北前船の帰り荷には数多くのお雛さまを積み込んだ<sup>35)</sup>。



「むきそば」と呼ばれる酒田の郷土料理。そばの実をむいて茹でたものにだし汁をかけ、冷たくして食べる。プチプチとした食感を楽しむ料理で、料理のスタートに出てくるメニューである。もとは関西の寺院で食べられていたのが江戸時代に酒田に伝えられ家庭料理になったとされている。素材を生かした

上品な味は日本料理の逸品。酒田は北前船による歴史的背景から京都や大坂の影響<sup>25)</sup>を強く受けており食文化にも波及した。北前船で運ばれた、贅をつくしたひな人形を見て回る風習は現在も残っている。



庄内平野稲作のシンボル山居（さんきょ）倉庫

1893（明治26）年に建った米保管庫。酒田は米の積出港として栄えたため、巨大な倉庫が必要で白壁・土蔵づくりの9棟、米の収容量は10,800 t（18万俵）の倉庫を作った。二重屋根は夏の建物内部の高温多湿防止のためである。



山居倉庫の背後と櫛（ケヤキ）

また、背後は櫛36本を西日防止のために植え自然を利用した低温倉庫で今も現役。現在は樹齢150年以上の美しいケヤキ並木となり、この中央にある石畳を朝ドラ「おしん」の主人公おしんが走った。東北では野球は巨人ファンの人が多いが、ここ酒田では阪神ファンが多く、これも北前船の影響。北前船が全国各地の文化を一本の糸でつないでいる。

#### （22、秋田県秋田市土崎湊

土崎湊は出航までの風待ち、船乗りたちがくつろぐ寄港地の茶屋などは諸国の芸能・文化の交流の場。熊本牛深港で生まれたハイヤ節が船乗りによって各地の寄港地に伝えられ土崎神明社祭りで奏でられるあいや節・おけさ節はハイヤ節が起源とされている<sup>36)</sup>。



土崎みなと歴史伝承館

土崎湊は古代より日本海海運の重要港としての役割を果たし、江戸時代から佐竹藩の年貢米の集積・積み出し港となった。秋田杉、米などを運び出す港で日本海北部の要港として栄え、北前船寄港地になり多くの船が集まった。土崎湊は典型的な河口港で、荷揚場は河口にあり、大きな船は入ってくる事ができなかった。北前船のように大きな船は海寄りに停泊し、小舟で荷物を荷揚場に運んだ<sup>36)</sup>。土崎には酒田、加賀名が付く旧町名や越後さん、越前さんなどの旧国名が付く名字があり、これは北前船が人と文化を運んだためである。明治時代には日本は経済産業の近代化を短期間で成し遂げた。北前船船主による銀行や企業成立への多額の投資が大きな力となったためである<sup>36)</sup>。19世紀初め、年間600隻を越え12軒の廻船問屋がにぎわい、ここからは米・農産物・海産物・秋田杉が出ていき、自給できない木綿・古着・塩・砂糖・紙などがやってきた。

(23、青森県下北半島佐井村

下北半島の西海岸に面している佐井港は天然の良港で、佐井村特産の南部桧（ヒバ）の交易が室町時代から賑わいをみせていた。



江戸時代には北前船での交易が盛んになった。下北半島は桧の一大産地で、殺菌力・耐湿性に優れ、建材として高値で取引され、北前船で江戸・京都・大坂まで運ばれた。ヒバは秋田杉・木曾ヒノキの三大美林の一つ。佐井村はヒバ材の積出港、また、北海道への渡船港としても栄えた。箭根森（やのねもり）八幡宮例大祭は、勇壮な山車が街中を練り歩き、この山車や祭囃子が昔の京都祇園祭に由来する様式が色濃く残り、北前船を通じて京都の文化が佐井に渡り村の繁栄の礎となった<sup>37)</sup>。

(24、青森県下北半島大間



大間は佐井村の北に位置し本州最北端の自治体。ここ大間も北前船の寄港地で、北前船の海運がもたらした有形・無形の文化財などが残されている。

#### (25、北海道

①函館市（明治2年に箱館から函館）：松前藩の交易港、初めは魅力の乏しい地であったが、東蝦夷地のアイヌ交易でその産物が函館経由で流通すると、北前船の来航が急増した。当時人口3千人ほどの寒村であった箱館は高田屋によって街としての発展の基礎が作られた。函館奉行が行った湾内の埋め立て、港としての整備、道路改修、植林や開墾、防火用井戸の設置、造船所などをつくり市街地整備は北前船の富が加わって加速した、その中心が豪商高田屋嘉兵衛であった。



箱館高田屋嘉兵衛資料館

「あくなき開拓精神と勇気を持ちつづけ北の地を舞台に情熱を燃やし尽くした海の男の物語<sup>38)</sup>」1769年貧しい農家の長男として、淡路島で生まれた嘉兵衛は海が好きで船乗りになった。5人の弟たちと回漕業を起し、1796年28歳で当時としては最も大きな辰悦丸（しんえつまる）を新造。箱館へ渡り、ここを拠点として西廻航路北前船の事業を展開し北の豪商になった。ニシンは主に綿花・菜種の肥料として、日本の農業の発展に寄与した。箱館の豪商として湾内の埋め立て、港の整備、道路の改修などを行い箱館繁栄の基礎を築き、「箱館の街の開祖」と言われ今も尊敬されている。加賀市の北前船の資料

館でも北前船船主は富を自分だけの物にはせず、道路整備、学校・病院を建て社会に還元した。これは高田屋嘉兵衛の出身は淡路島だが、北前船が近江商人たちから始まり、近江商人の三方よしの理念を具現化していると考えられる。買い手よし、売り手よし、世間よしという三方よしで自らの利益のみを求めめるのではなく利益が貯まると無償で橋・学校を建て世間のためにも貢献する精神。彼は幕府からの要請を受けエトロフ航路を開き、北方領土の開拓に尽力し、根室の街の基礎も作った。また、1798年幕府の要請を受け、国後島からエトロフ島への航路を拓き、未開のエトロフ島に多くの漁場を開拓し、1811年に発生したゴローニャン事件の解決を図りロシアとの民間外交にも尽力をした<sup>22)</sup>。



北海道昆布館

北海道昆布館のキャッチコピーは、「感じてください昆布のすべて」。昆布は寒流の親潮海域を代表する海藻で、北海道の重要な産物。江差方面から出発したコンブ船（松前船）は昆布を敦賀で降ろし、陸路で京都に運んだ。さらに、コンブ船は下関を廻り終着駅の大坂へきた。江差など北海道では昆布はそのまま出汁のみの利用、大坂の多湿な気候が乾物の昆布のうま味を熟成させ、加工が盛んになりコンブ屋が大坂にたくさんでき大坂の味になった。良質の昆布は大坂で消費され江戸には残りの昆布が行き、また江戸の水の硬度が大坂より高く、昆布のうま味が出にくかったため昆布ではなく鰹節が多く使われるようになった。出汁文化が、東は鰹節、西は昆布になった理由の一つだと言われている。沖縄と昆布の出会いは、偶然に沖縄の砂糖船と昆布船が出会い積み荷の交換がされ、昆布が豚肉料理と相性がいいことが分かり沖縄で大いに食べられるようになった。中国は沖縄から昆布の良さが伝えられ今も日本から輸入している。日本海側の富山、敦賀などに昆布が広まったのは北海道から北前船で昆布が運ばれたため、敦賀からコンブロードと呼ばれる海の道で京都、大阪へ、そして沖縄、中国まで運ばれた<sup>39)</sup>。

②松前市：日本の最北端で道内唯一の城下町が松前、城と桜の町として有名で、最北の小京都と呼ばれている。「松前の五月は江戸にもない」とうたわれた松前の栄華を再現した松前藩屋敷表門をくぐると江戸時代を体験できる<sup>40)</sup>。



松前藩屋敷

松前藩は渡島半島の南端に位置し、当時はまだ米を作ることができなかつたため、農業に経済基盤を置くことが出来なかつた。そのため、蝦夷地の砂金・木材などの特産物と松前に来る船からの税金が松前藩の主な収入源であった。幕末には三万人が住み、仙台以北最大の町。北前船が走る海の道を、産物・文化が行き来し北の辺地に豊かで華やかな町が生まれた。藩屋敷跡で栄華を誇った城下町を再現し、武家屋敷、番屋、廻船問屋など14棟が復元されていた。既に戦国時代から蝦夷で物産の取引で実績をあげていた近江商人が、江戸時代新たに北前船を開拓し、この松前で独占的な地位をかため港の整備をした。街の中心部に近江商人の廻船問屋が多く「松前は近江商人で栄えた」とされている。春、ニシンの大群が押し寄せた松前、17世紀松前に出店を開いた近江商人はニシン、昆布、干シアワビなど海産物を京都、大坂などで売りさばき、呉服物、米、味噌などを松前に運んだ。物資以外に京都の文化松前祇園ばやし、桜、椿などこの頃松前に運ばれた<sup>25)</sup>。ニシンは北前船時代、食料ではなく瀬戸内の綿花・藍などの肥料として高値で取引されていた。

③江差市・積丹半島：江差は江戸時代から明治初期までヒノキアスナロの産地、ニシン漁業・コンブ漁の基地として北海道を代表する商業港として繁栄した。これらの物資の取引に活躍したのが北前船を使って商売をしていた近江商人で、近江商人たちは松前藩と手を組んで蝦夷交易を独占し勢力を誇った。



旧中村家住宅（鯉御殿）

旧中村家住宅は、江戸時代から日本海沿岸の漁家を相手に、海産物の仲買商を営んでいた近江商人の大橋宇兵衛が建てた店舗兼住宅。鮭を塩漬けにした荒巻鮭、乾燥ニシン、昆布の開発など近江商人たちは北海道の産業育成に大きく貢献した。当時の近江商人の活躍を示す海産問屋中村家が国指定重要文化財として残っている<sup>5)</sup>。1915年（大正4年）、大橋氏が江差を離れる時支配人の中村氏が譲りうけた。家屋は当時北前船で運んだ笏谷石（しゃくだにいし）を積み上げた土台の上に、総ヒノキアスナロ切妻造りの大きな二階建ての母屋が乗った、問屋建築の代表的な造り。笏谷石は福井市足羽山産で江戸時代に露天掘りで採掘され、北前船で全国に出荷されていた。今は住宅の裏は埋め立てで幹線道路になっているが昔はここまで海があり船荷の上げ下ろしを住宅で直接できるように考えられていた。ニシンが豊漁の時代は「江差の五月は江戸にもない」とうたわれ、多くの商家が建ち並んだ商業の町・文化の町として発展、繁栄を極めた。民謡の王様江差追分は北前船により信州中山道の馬子歌が江差に運ばれてきたと言われている、江差山車（やま）も祇園囃子の流れをくみ北前船により運ばれてきた<sup>4)</sup>。



漁師たちの休憩小屋

積丹（ジャコタン）半島の神威（カムイ）岬。掘っ立て小屋は漁師たちの休憩小屋であちこちに建っている。



余市に行く途中の寿都町にしん街道の表示があり、寿都町もニシン漁で栄えた町。

④泊村



鯧御殿とまり（泊村有形文化財指定）

網元は商人に酒をすすめながらニシンの取引を鯧御殿でした。泊村でニシン漁が始められたのは約 300 年前と言われている。明治にニシン漁の全盛期を迎えると泊村に 50 を超える鯧番屋が建ち、莫大な富をもたらした鯧番屋は繁栄の象徴<sup>42)</sup>。取引は加工品が中心で大半は「メ（しめ）粕」などの肥料として全国に出荷。メ粕は魚肥の一種でニシンなどの生魚を蒸した後、搾油乾燥したもので窒素質肥料として使っていたが化学肥料の出現と魚不足から今は利用していない。

泊村にニシンが来なくなった理由が展示されていた。

- ・温暖化；今や地球規模の問題。
- ・乱獲；ニシンの捕獲量の多さが各地の北前船資料館の写真で伝わる。
- ・森林の伐採；北海道の開拓で森をつぶし、海の砂漠化でニシンの産卵場の海藻の減少とエサのプランクトンの減少。

資料がまとめられ見やすい資料館、泊村では平成 20 年からニシンの稚魚を 30 万 t 放流しニシンの復活を目指している。

⑤余市：余市は昔から漁業と果実栽培で栄えた。暖流の日本海流は余市に海の幸と果実に適した、温かな気候を与えてくれた。



旧下ヨイチ運上家（ウンジョウヤ）の玄関前



旧下ヨイチ運上家内部

松前藩が設置した運上家の遺構で、当時の格好をした人形が何点か配置され、当時さながらの雰囲気を持っている。松前藩は蝦夷地と本州からの松前船の取引を、運上金を払った商人に請け負わせるようにし商人は藩士が持っていた蝦夷地における漁業権を得た。その中で活躍したのが竹屋林長左衛門で、

1825年上下ヨイチ場所を明治まで4代請け負った。運上家は場所請負人によって設置され、アイヌと本州人・松前藩の和人ととの取引の場所、今で言うと総合商社である。多くの運上家は明治以降、番屋・倉庫に転用されニシン漁が衰退すると番屋の機能を失い朽ち果て、残っている遺構はこの旧下ヨイチ運上家のみになった。1806年に遠山の金さんの父もこの運上家に視察で滞在した<sup>43)</sup>。



旧余市福原漁場の納屋場



旧余市福原漁場の粕干場

この史跡は明治時代に福原家が経営していた漁場。漁場経営者は大宅（おおやけ）と呼ばれ、漁期には漁夫などを多くの人を雇った。余市をはじめ積丹半島各地は江戸時代からニシン漁でにぎわい、海岸線には番屋と呼ばれる漁家の住居を中心に蔵や加工施設を配した漁場の建物が立ち並んだ。福原漁場ではニシン漁から加工、製品化、製品の搬出までしていた。余市から積丹半島各地のニシン漁は江戸時代から昭和30年頃までニシンがコソゼンとやって来なくなるまで賑わった。ニシンが不漁になると、隆盛が嘘のようにニシン関係の人々は没落してしまった。北海道の江戸時代から明治時代にかけてのニシンの史跡は、ほとんど残っていないが旧余市福原漁場は主家・文書庫・米味噌蔵・網本などがまとまって残り、ニシン漁最盛期の漁場経営者の暮らしが分かる貴重な史跡。漁場は広く展示内容を見ることにより、当時の漁法、加工、生活などの繁栄ぶりを知ることができる。3月下旬から2か月ほどの漁期には、東北や道南などからの出稼ぎの漁夫など多くの人々が仕事をした。漁獲されたニシンは食用では生食用、身欠ニシンとして加工され、漁獲全体の6~7割は肥料として加工、出荷された。漁期の終わる4月末から5月になると、海上で待つ運搬船や貨車輸送で道内外に運ばれた<sup>44)</sup>。

⑥小樽市：アイヌ文化の長い歴史の後、江戸時代後半から始まるニシン漁、そのニシンを求めて北前船が来た明治初期に入船川河口に船泊まりが作られ集落ができた。そして明治時代以降の港湾設備によって発展した小樽<sup>44)</sup>。明治から大正にかけては、北海道の玄関口として、北海道一の経済都市であった。そして小樽運河はその繁栄を象徴する。1869年蝦夷地が北海道と改称、開拓使が設置されると各地から移民が押し寄せ人口が急増、北前船は従来の道南の取引に加えそれら移民の生活物資を運ぶ新たな役割ができ、たくさんの人や物資が行き交い、たいへんな賑わいを見せた。北前船主は次々と小樽に進出、営業倉庫を設立するあたらしいビジネスを展開した<sup>46)</sup>。



鯨盛業屏風小樽市総合博物館所蔵（掲載了解済み）

以前北前船の資料集めで行った福井県旧河野村の右近家所蔵の北前船久恵丸の模型が展示されていた。大坂を春に出て風をたよりに50～60日で北海道に北前船が来るようになり江戸時代後期から明治中期まで小樽は上方文化の上陸地になった<sup>46)</sup>。小樽運河沿いに旧小樽倉庫群があり、これは廻そう業をはじめた北陸の北前船主たちが倉庫をはじめて建て、北前船船主が作った倉庫街。大きな船を沖に泊めはしけを使って荷揚げ作業をしていましたが、荷量が多くなり効率よく行うために海面を埋め立てることでできた小樽運河。小樽運河は大正12年に完成し、荷揚げ作業が効率よくできた。小樽市総合博物館は北陸富豪村の西谷庄八が建てた営業倉庫跡。小樽に倉庫を建てたのは道東の昆布と日本海側のニシンが集まる好立地であったためと言われている。ニシンとニシン粕は西日本の綿・藍・菜種の肥料として需要が高まり、近江商人に雇われた北陸の船乗りによって西廻り航路で日本海、瀬戸内海の寄港地により大坂まで運ばれた。蝦夷地で必要な米、塩、しょうゆ、みそ、衣類などは本州から来た。漁猟中心の蝦夷地では塩は魚の処理・保存に欠かせなかった。北前船の荷は米、塩、綿、炭、薬、畳表、陶器など松前藩の財政を支えたのはアイヌが収穫した海産物との取引による収益。明治時代に入り政府による北海道の本格的な近代化が推し進められた。鉄道など陸路が未整備であったため、北前船が北海道に必要な物資や開拓民の生活必需品などの輸送を担った。北前船の存在なくして北海道の開拓はあり得なかった。物資の集積地になった小樽にはその保管施設である倉庫が加賀橋立の西出孫左衛門、西谷庄八、福井県南越前町の右近権左衛門などが次々建てた。また、日露戦争で日本の領土になった南樺太への中継地として小樽は絶頂期へと向かい、鉄道の延伸や港湾の設備などでこのころから北前船は小樽から姿を消していった。

⑦小平（おびら）町：明治時代から大正時代にかけて北海道西海岸のニシン漁は全盛を極め、特に鬼鹿海岸は千石場所（ニシンがたくさん獲れる場所）でニシンの群来（くき；海がニシンの放卵放精で乳白色になる現象）と共に海の色は乳色に変わり、群れ飛ぶカモメと波間を渡るヤン衆（北海道のニシン漁季節労働者の呼称）で湧き返り<sup>47)</sup>、なかにし礼作詞の石狩挽歌<sup>47)</sup>にも出てくる。



旧花田家番屋



旧花田家番屋の内部

1905年頃に網元の資産家花田伝作が建てた番屋、最盛期には18か統のニシン定置網を経営する道内屈指のニシン漁家。番屋は二階建て家屋で、道内で現存する番屋では最大の規模。番屋とは漁民が漁場近くの海岸線に建てる作業場兼宿泊所のことで鯨御殿も番屋の一種。花田家の内部で漁師・船大工・鍛冶職人・屋根職人など雇人200人ほどを収容していた<sup>(22)</sup>。解放されている家の中を貴重な資料が展示されている。また、花田家は断絶しているため花田家についての情報を集めている。

⑧焼尻（ヤギシリ）島：焼尻島は北海道羽幌町から西の沖合25km、日本海に浮かぶ島。焼尻島の港の北の高台にある、旧小納（こな）家。旧小納家の眼下にある港には番屋（漁場近くの作業場兼宿泊施設）が港一杯に建てられていた。

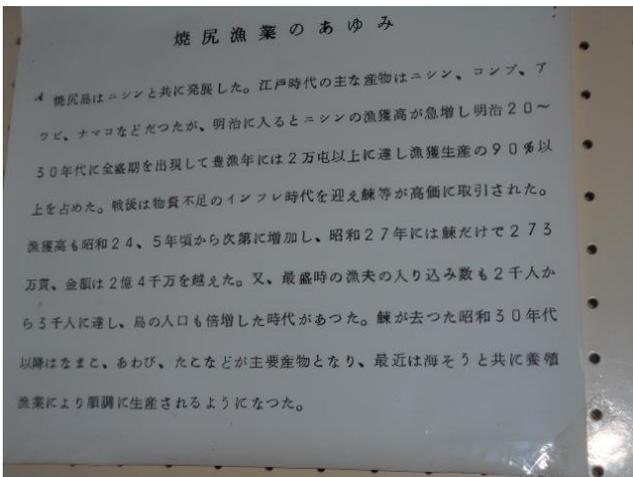


焼尻郷土館（旧小納（こな）家）



焼尻郷土館（旧小納家）内部

石川県塩谷村（現在加賀市）出身の焼尻島の網元2代目小納（こな）宗吉氏が1900年に建築した木造2階建ての住宅で現在は焼尻郷土館。洋風建築で黒檀、ヒノキ材を使い当時のニシン漁での豪勢な生活を見ることができる。小納家は120年の歴史を持つ豪商で漁業、呉服、雑貨商、郵便局などを営んでいた。焼尻島はニシンと共に発展した島で江戸時代にニシン、昆布、アワビなどで生活をしていた。1887年から1897年ごろがニシン漁の全盛期で1952年も大漁で1955年以降ニシンはこの地をさった（展示物より）。1844年松前藩の命によりニシン場を開設した名残が厳島神社として焼尻島に残っている。



焼尻郷土館展示物



めん羊サフォーク種

島からニシンが去ったあと何で稼ぐかを模索した若者2名が羊牧に挑戦した。それが今は国内有数の産地となり、島中央部に広がる牧草地でめん羊サフォーク種500頭ほどが放牧されている。

⑨稚内市：北海道本島最北のまち、宗谷海峡をはさんで東はオホーツク海、西は日本海に面している。



登録有形文化財 旧瀬戸邸

(稚内市教育委員会ホームページ許可済み)

稚内は昭和 20～40 年代底曳網（そこびきあみ）漁の前線基地として、国内各地から人が集まり活気に満ちあふれていた。旧瀬戸邸は、底曳き漁業が活気にあふれていた昭和 27 年に底曳きの親方瀬戸常蔵が建てた<sup>48)</sup>。北海道の日本海沿岸は昔からニシン漁場として有名で、稚内は江戸時代から宗谷場所にニシン漁場がありニシン漁が盛況。戦後から昭和 40 年代まで稚内の底曳き漁業が日本の食卓を支えたと言われる。200 海里規制以降「獲る漁業」から「育てる漁業」へと水産資源を永続的に有効活用する方向に活路を求めて現在は漁業をしている。利尻コンブは利尻、礼文、稚内で獲れるコンブの総称で 7～8 月の 2 か月間が収穫時期、7～8 月は忙しくなるので、ここでは 6 月に夏祭りをする。

⑩野付郡別海町おだいとう



北方展望塔展示室

おだいとう道の駅に北方展望塔展示室があり北方領土の歴史や返還に向けた取り組みが展示されている。展示物の右下が高田屋嘉兵衛の偉業の紹介である。

⑪根室市：根室金刀比羅神社は高田屋嘉兵衛が 1806 年に北方交易での航海の安全、漁場請負の時に海上安全と漁業・産業の振興を祈願して創建。根室と北方領土、千島列島の開拓・交易の歴史を今に伝える社になっている。1986 年ここに住民の手で銅像が建てられた。



根室金刀比羅神社高田屋嘉兵衛像

淡路島出身の高田屋嘉兵衛は弟たちと回漕業を起し、淡路島から箱館へ渡り西廻航路北前船の事業を展開し箱館の豪商として箱館繁栄の基礎を築いた。彼らは幕府から依頼され北方領土および根室地方の開拓にも尽力した<sup>49)</sup>。

⑫北海道博物館：1971年北海道開拓記念館として建てられ、2015年開拓記念館とアイヌ民族文化研究センターとが統合して新たに北海道博物館として開館。



2019年は北海道150年行事として北海道命名者松浦武四郎（1818～1888年）「幕末維新を生きた旅の巨人」<sup>50)</sup>特別展をしていた。彼は探検家で蝦夷地を探索し北海道と言う名前を考案した人物。



アイヌ民族から和人への交易品

館内で展示されているアイヌ民族から和人への交易品で昆布、ニシンなど。

(24 中国大連市：中国大連国際空港到着口で、北前船のプラカードに遭遇し、600 人ほどの日本人でごった返していた。



北前船寄港地フォーラム

帰国後調べてみると北海道と本州の交易を支えた北前船ゆかりの地を中心に交流する「北前船寄港地フォーラム in 大連(2018. 5. 27)」が、中国遼寧省大連市で開かれた。23 回目で、海外での開催は初めて。交流を促進し、中国からの観光客拡大を狙うのが大連開催の目的<sup>50、51)</sup>である。

### Ⅲ、おわりに

#### 1) 北前船の終焉の原因

繁栄を誇った北前船は明治中期以降から経営が衰え、ついには終末を迎えるその原因は電信と鉄道が内陸部に開通・発達時代の流れがあった。電信で情報が早く入手でき産地と消費地の間に価格差がなくなり、主要都市に物資が集まり地方の小船主の本拠地の港は衰退した。明治 24 年に東北鉄道が開通して北海道は東京の経済圏に入り北前船の活躍する余地が無くなった。北前船で大儲けできたのは新しい情報を独占していたことによる、情報が広く行き渡るようになると北前船のうまみがなくなり衰退していった。

#### 2) 北前船がひらいたもの

##### ① 海上輸送で経済を促進し日本の発展に貢献

江戸時代までは陸上交通での大量輸送が難しく海上輸送に頼っていた。全国の産物の大量輸送に北前船が大きな役目を果たし日本経済の発展に大きく貢献した。江戸中期から明治中期の鎖国時代に全国の経済を促進し、動くマーケットとして近世の物量に多大の影響を与えた。

##### ② 北前船の財力で維新から明治への移行が早く進んだ

豊富な資本を蓄積していた北前船主は北前船が衰退した後、西洋型帆船を使った近代海運業、近代的漁業を発展させた人々、主要な港で問屋商人になった人々、不動産業、金融部門などへ進出して生き残った人々など多方面へ資本を活用した。海運の近代化を進めるとともに海上保険業に乗り出し事業の転換を計った、海難事故が絶えなかった北前船の経験を生かして明治時代に海運保険を初めて導入し損保業界に進出し、現在の損害保険ジャパンの前身日本海上保険を設立した。明治時代には日本は経済産業の近代化を短期間で成し遂げた。これは、北前船船主による銀行や企業成立への多額の投資が大きな力となったためである。北前船での財力を社会に還元し道路整備、学校・病院を建て、地域の人たちは船主たちの子孫を今も尊敬している。

##### ③ 日本の農業・水産業の発展に寄与

北前船が飛躍的に伸びた原因は日本国内の農業生産構造に変化がおこったためである。従来はたい肥を主とした米栽培であったが、単位面積当たりの収穫量を増やすため魚肥の使用が始まった。それにはニシンの粕が有効で綿花・菜種の肥料として、日本の農業の発展に寄与した。北海道のニシン魚が拡大していき日本の農業革命を推し進めた。江戸末期から明治、大正、昭和と100年以上にわたるニシン漁が北海道の水産業を多いに発達させ、それまで培われた水産加工技術が日本の水産業を発展させ人々の誇りとなった。

#### ④ 北海道の人口増大と開拓

魚肥を生産するには大量の魚を必要とし大勢の労働力、加工するにも多くの労働力が必要であった。そのため、漁期には漁夫などの労働力として東北など道外の人々も北海道へ仕事を求め渡り、大きな人口移動があり、北海道が発展した。開拓使が設置されると各地から移民が押し寄せ人口が急増、鉄道など陸路が未整備であったため、北前船が北海道に必要な物資や開拓民の生活必需品などの輸送を担った。北前船の存在なくして北海道の開拓はあり得なかった。

#### ⑤ 長州・薩摩藩の志士への財力支援

北前船がもたらした大きな富が長州藩の豊かな軍資金になり、革新を目指す維新の志士らの支えとなった。薩摩藩も北海道の昆布を琉球から中国へ輸出し、莫大な富を得て幕末の討幕の資金とした。北前船が長州藩・薩摩藩の討幕のきっかけを作り時代を動かした。

#### ⑥ 各地の食文化の発展と各地の文化が全国へ拡大

江戸末期から明治、大正、昭和と100年以上にわたり、ニシン漁が人々に与えた恩恵は暮らし・文化・芸能と建造物から産業にいたるまで色濃く西日本、北海道へいきわたった。食文化ではおせち料理は近江商人のおかげ、京都のにしんそば・大阪の吹き寄せ昆布は近江商人の活躍から生まれた特産品。鮭を塩漬にした荒巻鮭、乾燥ニシン、昆布の開発など近江商人たちは北海道の産業育成に大きく貢献した。「むきそば」と呼ばれる酒田の郷土料理は関西の寺院で食べていたのが江戸時代に酒田に伝えられ酒田の家庭料理になった。文化では佐井箭根森（やのねもり）八幡宮例大祭の山車や祭囃子は昔の京都祇園祭に由来し北前船を通じて京都の文化が佐井に渡り、村の繁栄の礎となった。これらから、北前船で文化が移動したことが分かる。酒田は京都から京友禅、京人形の都の文化を持ち帰り現在もひな人形で町おこしの行事をしている。また、東北では野球では巨人ファンが多いが、ここ酒田では阪神ファンが多く、これも北前船の影響。旧国名の付く名字があり、これも北前船が人と文化を運んだためである。北前船が全国各地の文化を一本の糸でつないでいることが分かる。

#### ⑦ 和食の昆布のうま味

関西の出汁の食文化は大坂で確立し、全国に拡散した。現在、世界遺産に選ばれた日本の食文化を代表する昆布が北前船で確立した。また、富山の薬売りともつながっていった。昆布が豚肉料理と相性がいいことが分かり沖縄で大いに食べられるようになった。中国は沖縄から昆布の良さが伝わり風土病対策に輸入した。

#### ⑧ 択捉国後島間の航路を発見し、新たな漁場を開くなど北方を切り開いた

江戸時代鎖国状況にも関わらず、幕府から依頼され北方領土、千島列島の開拓・交易および根室地方の開拓に尽力し、国後島からエトロフ島への航路を拓き、未開のエトロフ島に多くの漁場を開拓した。また、ロシアとの民間外交にも尽力をした。南太平洋の島々やアメリカ大陸で交易したと言われる船主もいた。

3) 「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～<sup>35)</sup>。」平成29年4月に文化庁から、北前船ゆかりの45の市町が、日本遺産に認定された。日本遺産は点在する文化財等をストー

リーで結び、歴史の魅力を観光振興に活かすことを目的にしている。ストーリー：日本海や瀬戸内海沿岸には、山を風景の一部に取り込む港町が点々とみられます。そこには、港に通じる小路が随所に走り、通りには広大な商家や豪壮な船主屋敷が建っています。また、寺社には奉納された船の絵馬や模型が残り、京など遠方に起源がある祭礼が行われ、節回しの似た民謡が唄われています。これらの港町は、荒波を越え、動く総合商社として巨万の富を生み、各地に繁栄をもたらした北前船の寄港地・船主集落で、時を重ねて彩られた異空間として今も人々を惹きつけてやみません。

日本遺産認定の北前船寄港地・45市町：函館市、小樽市、石狩市、松前市、鱒ヶ沢町、深浦町、野辺地町、秋田市、能代市、男鹿市、由利本荘市、にかほ市、鶴岡市、酒田市、新潟市、長岡市、上越市、佐渡市、出雲崎町、富山市、高岡市、金沢市、小松市、輪島市、加賀市、敦賀市、小浜市、坂井市、南越前町、宮津市、大阪市、神戸市、姫路市、洲本市、赤穂市、高砂市、たつの市、新温泉町、鳥取市、浜田市、倉敷市、呉市、竹原市、尾道市、多度津町

4) 世界遺産 平成25年12月「和食；日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録された。和食を通じて、日本の出汁や旨味の文化も世界で注目されている。出汁のうま味は昆布などの植物性のうま味成分「グルタミン酸」とかつお節などの動物性のうま味成分「イノシン酸」を組み合わせたもので出汁の相乗効果で全体のうま味が増すのが特徴である。

#### 引用文献

- 1) 日本海の大動脈 NHK 新日本紀行 2020年4月11日
- 2) 石川県銭五の館展示図録 p18
- 3) 北前船舞鶴/宮津/久美浜/竹野パンフレット
- 4) 中西聡 第5回「西廻り」航路フォーラムの記録 地域から見た日本海開運 p125 発行福井県河野村
- 5) 近江商人ってな～に？ p12 p18 企画・編集東近江商人博物館
- 6) 中西聡 第5回「西廻り」航路フォーラムの記録 地域から見た日本海海運 p128 発行福井県河野村
- 7) 近江商人ってな～に？ p32 企画・編集東近江商人博物館
- 8) 近江商人ってな～に？ p19 企画・編集東近江商人博物館
- 9) 斎藤善之 東北学院大学 地域から見た日本海海運 p170 福井県河野村
- 10) 読売新聞 2020年4月
- 11) たつの市立室津海駅館 パンフレット
- 12) 赤穂市坂越 パンフレット
- 13) 第5回「西廻り」航路フォーラムの記録 地域から見た日本海海運 p128 発行福井県河野村
- 14) 高田屋嘉兵衛パンフレット 発行高田屋顕彰館・歴史文化資料館
- 15) こんびら街道 海の玄関なつかし多度津のまち歩きパンフレット
- 16) 多度津今昔物語
- 17) 文化庁日本遺産ポータルサイト (STORY#049 一輪の綿花から始まる倉敷物語)
- 18) 備陽史探訪 101号 備陽史探訪の会 2001年6月発行

- 19) 北前船とその時代-鞆の津のにぎわい- p2 福山市鞆の浦歴史民俗資料館発行
- 20) 主な北前船寄港地と関連地 鞆の浦 HP
- 21) 引き札 Wikipedia
- 22) 江戸・明治の日本経済を支えた日本海沿岸航路北前船 舞鶴/久美浜/竹野/宮津パンフレット
- 23) 北前船主の館・右近家 パンフレット
- 24) 第5回「西廻り」航路フォーラムの記録 地域から見た日本海海運 p131 発行福井県河野村
- 25) 北前船日本遺産推進協議会 <https://www.kitamae-bune.com/travel/>
- 26) 石川県銭屋五兵衛記念館のあゆみ 石川県銭屋五兵衛記念館銭五の館 展示図録 編集石川県銭屋五兵衛記念館
- 27) 第5回「西廻り」航路フォーラムの記録 地域から見た日本海海運 p133 発行福井県河野村
- 28) ゼニヤアルミニウム製作所会社紹介 <https://www.zeniyaalumi.co.jp/comp/index.html>
- 29) 伏木北前船資料館パンフレット
- 30) 四十物こんぶホームページ <http://www.aimono.com/company/index.html>
- 31) 北前船が運んだ北陸の食文化 BLUE SIGNAL JR 西日本  
[https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/06\\_vol\\_104/feature02.html](https://www.westjr.co.jp/company/info/issue/bsignal/06_vol_104/feature02.html)
- 32) 広貫堂資料館 <http://www.koukandou.co.jp/shiryoukan/>
- 33) 北前船の時代館旧小澤家住宅パンフレット
- 34) 豪商の面影を今に 本間家旧本邸ご案内パンフレット
- 35) みなと総合研究財団ホームページ <http://www.wave.or.jp/minatobunka/index.html>
- 36) 北前船寄港地“あきた”をめぐる パンフレット
- 37) 佐井村ホームページ <http://www.vill.sai.lg.jp/>
- 38) 箱館高田屋嘉兵衛資料館パンフレット
- 39) 感じてください昆布のすべて 北海道昆布館パンフレット
- 40) 松前藩屋敷パンフレット 松前観光協会
- 41) 江差之旅かわら版パンフレット 江差町追分観光課
- 42) 鯨御殿 とまりパンフレット
- 43) 旧下ヨイチ運上家 パンフレット
- 44) 国指定史跡旧余市福原漁場パンフレット
- 45) 小樽市ホームページ <https://www.city.otaru.lg.jp/kankou/nihonisan/>
- 46) 小樽市総合博物館運河館「小樽」を知るパンフレット
- 47) 鯨番屋 北海道小平町パンフレット
- 48) ～稚内の漁業の歴史を伝える～登録有形文化財 旧瀬戸邸パンフレット
- 49) 金刀比羅神社(根室市) <http://hokkaido-travel.com/kitamaebune/ho0490/>
- 50) 北海道博物館特別展 幕末維新を生きた旅の巨人松浦武四郎パンフレット
- 51) 荘内日報 <http://www.shonai-nippo.co.jp/cgi/ad/day.cgi?p=2018:05:30:8554>
- 52) (株) ANA 総合研究所 <https://www.anahd.co.jp/group/ari/news/20180522.html>